

## 第 41 年度（2025 年度）ソフトウェア品質管理研究会 分科会紹介

「幅広い視点でプロセス改善の効果を最大限に活かし、“蛇”のように脱皮して大きく成長しよう！」

- 皆さんの組織では、プロセス改善を、トップダウン・ボトムアップのいずれかで行っていますか？
- ・トップダウンの場合：経営管理層から、世間で評判のトレンド技術・ツールを導入して、品質・生産性向上につなげて欲しいと指示を受けたので、何とか期待に応えようと深く考えずに導入したけれど、長続きしない。
  - ・ボトムアップの場合：ある技術者が、自前で何か良い技術・ツールを導入して個人的に成果を出しているようだが、組織として有効活用されていない。

もしこのような問題が、皆さんの組織で発生しているようであれば、是非 SQiP 研究会をお勧めします。なぜなら、これらの問題を抱えた研究員が SQiP 研究会に集まり、一生懸命議論を繰り返し、素晴らしい研究成果を挙げているからです。

一例を挙げると、研究員の職場では、経営管理層や開発現場の意向により、流行する技術・ツールの導入が先行決定される場合がよくあり、導入決定後に研究員自身が何とか成果を挙げるために大変苦労していました。そこで、研究員は、SQiP 研究会活動の中で、深く議論を繰り返し、自身の経験と知見を結集した結果、研究成果として『改善効果探索マップ』を導出しました。

本マップは、「個人」「プロジェクト」「組織」「社外」の階層に分類して改善効果を抽出し、関連が深いもの同士を紐づけしています。全階層に渡って改善効果を網羅的に抽出してくれるという優れモノです。期待効果として、技術・ツールの導入時に、「効果予測を分析する手間が抑えられるので、短時間で導入できる」かつ「関係者への納得感の醸成や、組織的な改善活動の推進につながる」などが挙げられます。今後改善効果探索マップが数多く活用され、各組織の発展につながることを期待します。

私たち研究コース 1（ソフトウェアプロセス評価・改善）では、特に開発プロセスの視点で、ソフトウェア開発現場の要求分析から試験、運用・保守までを対象に、現場密着型の課題とその解決策を探索する研究を進めています。「プロセス、技術、人」をベースに、従来からのプロセスモデルや品質モデルだけにとらわれず、最近では生成 AI や DX などの最新技術にも着目した研究活動を行っています。品質を向上させるだけでなく、QCD のバランスを良くすることや楽しく開発することも目指して、課題解決策を研究しています。

研究会の主役は研究員の皆さんです。研究員それぞれが問題を持ち寄り、その問題の本質や原因を議論し合って課題設定し、課題解決策の仮説を研究テーマにします。研究テーマの有効性（課題解決につながるか否か）を実験、評価し、最終的に論文化し自分の職場に持ち帰っていただきます。

研究活動は以下の講師陣でサポートします。皆さんの豊富な、知識、経験とアイデアで、品質やプロセスの悩みや課題をたくさん議論し、相互研鑽できることを楽しみにしています！

### ◆主査：田中 桂三（オムロン 株）

オムロンのソフトウェア開発事業における品質保証、開発プロセス作成、開発プロジェクトリーダー、およびこの日本科学技術連盟の SQiP 研究会における長年の活動を通じて、ソフトウェア開発の品質保証とプロセスの課題解決を継続的に推進中。

### ◆副主査：中森 博晃（パナソニック コネク ト株）

パナソニックグループ全体のコーポレート SEPG・SQA の両面の経験を基に、現在は事業部門の開発プロセスの改善と評価を行っている。

今年の干支は「巳（蛇）」。巳（蛇）は復活や再生の象徴であり、また成長する過程で何度も皮を脱ぎ捨てて、新しい皮へ生まれ変わります。皆さんも、「蛇」のように脱皮して、新しい皮（技術）を身にまとい、大きく成長していきましょう！！